Japan Geoscience Union Meeting 2013
(May 19-24 2013 at Makuhari, Chiba, Japan)
©2013. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.

MZZ41-06 会場:102A 時間:5 月 19 日 12:15-12:30

地球惑星科学史をどう書くか　-ウィッグ史観の功罪-
How to write the history of geoscience -right and wrong of Whig interpretation of history-

青木 滋之 [1*], 山田 俊弘 [2], 矢島 道子 [3], 吉田 茂生 [4]
Shigeyuki Aoki[1*], Toshihiro Yamada[2], Michiko Yajima[3], Shigeo Yoshida[4]

[1] 会津大学, [2] 千葉県立幕張総合高等学校, [3] 東京医科歯科大学教養部, [4] 九州大学
[1]University of Aizu, [2]Chiba Prefectural Makuhari Sogo High School, [3]Tokyo Medical and Dental University, [4]Kyushu University

地球惑星科学の形成史をたどり記述していくにあたっては、どのような「史観」を持つかが重要なファクターとなってくる。例えば、三巻本の惑星科学史 (1996) を著しているスティーブン・ブラッシュは、ウィッグ史観 (Whig interpretation of history) を論じた Brush(1995) において、ウィッグ史観を完全に排除するのは困難であるとしているが、実際に彼の惑星科学史 (1996) を見てみると、そこで扱われているトピックは、惑星形成論から地球内核、地球の年代の研究といった、現在の我々の関心から選択されたものが多い。こうして、少なくとも問いの立て方においては、歴史記述は現在の我々の関心と相対的になされることは不可避である。しかし他方、現代の知識や方法論などを過去の科学者に過度に読み込もうとするようなアナクロニズムや、ハットンの斉一説を当代での名声以上に評価するようなタイプのウィッグ史観は、同時代の実態を捉えた客観的歴史記述とはとても言えない。こうして、記述内容に関して言えば、当該科学者の生きた時代の知見や背景などを考慮した同時代的な歴史記述が必要である。

しかし、もっと深いレベルの話になると、話はそう単純ではない。例えば、こうしたウィッグ史観批判そのものが、現代の我々の視点から成り立つものであり、ある種のウィッグ史観を前提としたものだという Oldroyd(1985) の指摘はもっともであろう。また現代史のように、現存する地球惑星科学者のオーラル・ヒストリーをまとめる場合（青木 2013）には、「事実」の語りの中に不可避的にウィッグ史観が入ってくるかもしれないが、それまで排除することが可能／望ましいことなのだろうか。また他にも問題なのは、どのような「史観」を取るかは文脈（目的）に相対的であり、さらに著作は往々にして文脈横断的である、ということである（伊勢田 2013）。科学史家は、客観的記述を目指す。しかし、一般向けの科学史や、科学教育のための科学史は、むしろ適度な単純化・理想化（＝ウィッグ史観の持ち込み）をした方が一場合によってはフィクションの方が一目的に適う、と言われることもある。現代史には、科学者が過去を回顧しつつ書かれるものである、という側面もある。

こうして、現代地球惑星科学史の構築には、様々な立場の融合が可能かという問題も浮上してくる。以上のようなウィッグ史観にまつわる諸問題を、本発表では提起し論じたい。

キーワード: 科学史, 科学哲学, 地球惑星科学史, 地球科学史, ウィッグ史観
Keywords: history of science, philosophy of science, history of geoscience, history of earth science, Whig interpretation of history